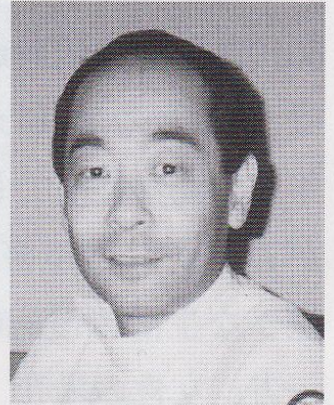


リレーエッセイ 6 ■私と漢方の出会い

漢方薬だってすごく効く

くどうちあき脳神経外科クリニック院長(大田区)

工藤 千秋



医者になって駆け出しの研修医の頃、私の指導医の外来に、頭痛、肩こり、めまい、のぼせに悩む40代後半の女性が受診してきた。私は診察助手をしながら、肩こりにはこの薬、めまいにはこの薬、のぼせにはこの薬というように、教科書に載っている型どおりの治療薬を頭にめぐらせていた。ところがその指導医は、「更年期障害のようですね。薬は少ない方がいいですから、まず漢方薬の一種類だけで体質を変えてみましょう。」と話し、トウキシヤクヤクサン当帰芍薬散を処方した。それから2週間後、4週間後と、その患者さんは受診されるごとに症状が軽減していった。これにはビックリした。

なぜ漢方薬が効くのか、その理由を調べたくなった私は、パーキンソン病に対して脳移植の外科を学んでいた留学先の英国バーミングガム大学で、培養脳細胞に漢方薬を投与したところ、予想以上に脳が反応したことに再び驚いた。西洋医学のみの教育で育った私たちの世代にとって、漢方薬といえば「ホントに効くの?」と思ってしまう傾向があるようだ。しかし、どの漢方薬がどの症状に何故有効か、その科学的根拠がみつければ疑いの余地はなくなる。

外科医であった指導医が、あの時私に向かって言い放った「工藤君、漢方薬だって体に合えばすごく効くものだよ。患者さんの症状をみて、効く薬を見つけることがわれわれのやるべき仕事だ。」という言葉が、今も私の心をとらえて放さない。